幼馴染みと猫と俺と。

有川 美咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染みと猫と俺と。

【Ｎコード】
Ｎ８１６０Ｒ

【作者名】
有川　美咲

【あらすじ】
主人公・京介（きょうすけ）と、１６年間の付き合いのある幼馴染み・律華（りつか）。
小さいころから秘密のあった律華と、そんなことなど全く知らない京介の、日常と非日常。

【＊】第1話（前書き）

この作品は、獣化の表現があります。
獣化が苦手、嫌いな方は読まないでください。

【＊】第1話

だるい。

初夏。雲ひとつない澄み渡った空。
朝から太陽の光は俺の体に突き刺さるようにギラギラと輝いている。
ただでさえ暑いのに、学校への坂道は俺を嘲笑うかのようにそこに横たわる。

「京介ー！！」

だらだらと前に進めていた足を止め、声のした後方を振り向く。

「おはよ。またすごい汗だね…」

走って俺の横に並んだのは、幼馴染みの律華（りつか）。

「暑いんだから仕方ねーだろ。……お前、走って来たよな？」

律華を見る。
こいつは今走って俺の隣に来た。
なのに、まったくと言って良いほど汗をかいていない。

「走って来たけど？」

首を傾げ、ポニーテールを揺らす律華。

「なんで走って来たおまえより歩いて来た俺の方が汗かいてんだよ…」

「んー…。あ」

律華が何かを思い出したように自分の鞄をごそごそと探る。

「京介、これあたしの飲みかけなんだけど、いる？」

差し出されたのはスポーツ飲料だった。

手に取ると、それは買ったばかりらしく、キンキンに冷えていた。

「全部飲むけど」

「いいよ、別に。あたしはまた学校で買うし」

じゃあ、とペットボトルに口をつける。

俗に間接キスというのだろうが、律華も俺も、赤ん坊の時からの付き合いだから、特に気にしない。

「逆にさ、何したらそんな汗かくわけ？確かに暑いけどさ、そこまでなくない？」

呆れたように俺の顔をのぞきこむ。

「……ぷはっ！！…お前はよく運動してるから鍛えられてんだろ」

飲み終えてから、答えてやる。

律華は小さな頃から運動神経が良く、運動については何もやらせても良い成績を残してきたし、部活も転々としていた。

そのせいか、律華は１つのことに執着することを忘れた。

それに律華は、勉強も何もかもこなす天才肌だからなおさら。

「で？今日はラクロスの助っ人じゃなかったのか？」

空になったペットボトルを、すぐ近くにあったゴミ箱に投げ捨て、言う。

「ラクロスは昨日。それに、助っ人するのは昨日でもうやめた」

「は？何でだよ」

「飽きたの。それにおかしくない？部員はたくさんいるのに、部外者のあたしが、さもレギュラーみたいに試合するの。一生懸命頑張ってる部員に対しても、あたしの行為って邪魔でしかないだろうし、１人１人の努力を踏みにじってるみたいで嫌なの」

真っ直ぐ前を見たまま、淡々と言葉を紡ぐ。

頼まれたから、と、何も考えずにしてるんだと思っていた。

「…それに……」

律華が何かをぼそっと呟いたが、聞き取ることはできなかった。

「？　…どうした？」

聞くと、律華は慌てて

「な、なんでもない！！」

と言った。

――――――――――

第１話、完。

ちょっとキャラ紹介をします。

主人公
黒田（くろだ）　京介（きょうすけ）

５月２９日生まれ。双子座。Ｂ型。高校２年。

身長１７７ｃｍ。体重６８ｋｇ。

めんどくさがりで飽きっぽい。成績は、毎回平均くらい。

栗色の髪で、すこし長め。切れ長の黒い目。

と、京介はこんなかんじです。

律華のプロフィールは、２話目の最後に。

読んで頂き、ありがとうございました。

【＊】第2話（前書き）

この作品には、獣化の表現が含まれています。
苦手・嫌いな方は読まないでください。

【＊】第2話

今、あからさまに何かを隠した律華。

「京介はさぁ……」

何かを言おうとして、言葉を詰まらせる。

そして、『やっぱりいい』と、そう言ってせつなげに顔を少し俯かせた。

「…無理矢理話せとは言わねーよ」

俯いていた律華が、びっくりしたようにぱっと顔を上げ、俺を見た。

「…でも、だ。何か大事なことなら、いつでもいいから話せよ？」

「…うん、……そう、だね」

律華に、いつもの元気が見られない。

いつもなら、『なんちゃって』

てか言って悪戯に笑うのに、今の律華からはそれが感じられない。

律華には、父親がいない。

そのことで俺のとこに来ては泣くことが多々あったが、そのことなら幼稚園に行っていた頃から知っている話だ。

今更隠すことじゃないし、同じ学校に通っているクラスメイトだって、だいたい知ってる。

じゃあ、何だ。

こいつを悩ませているのは、一体何だ？

あんなに明るい律華がここまでになるなんて、相当だ。

赤ん坊のころから一緒にいるから分かる。

律華はそんなにやわじゃない。

悪口があっただとか、

いじめがあっただとか、

そんなんじゃない。

むしろ律華は人に好かれるタイプだから、まずそれらではない。

「律華ぁー！！」

声のした方を見ると、校門の前で手を振る女子がいた。

「あ、凛（りん）ちゃんだ。京介、あたし先に行くね！」

「あぁ」

俺のその短い返事を聞いて、律華は走り出し、

「京介！」

「何だよ？」

律華は振り返って、『ごめんね』と、確かにそう、口パクで俺に言

った。

「あぁ、気にすんな！」

律華は、その友人のもとに走って行った。

前方に方向転換したときも、

やっぱりあいつは、

寂しそうな、

悲しそうな、

でもそれでいて

安心したような表情を浮かべ、走って行った。

当分、あいつのその表情は忘れられそうになかった。

――――――――――――

第2話「表情」

はい、ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

今回はヒロインの律華の紹介をします。

橘（たちばな）　律華（りつか）

1月7日生まれ。射手座。

高校2年。

身長160cm。体重49kg。

熱しやすく冷めやすい。成績は常に学年5位以内。スポーツはほぼ全てできる。

黒髪、長髪で、大抵ポニテかツインテール。目はぱっちり。

父親がいない。

と、こんなかんじです。

キャラやこの作品の質問は、できるかぎりこの場でお答えしていきます。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

【＊】第3話（前書き）

この作品には、獣化の表現があります。
嫌い・苦手なかたは読まないでください。

今回は律華側です。

感想、待ってます。

【＊】第3話

「ねぇねぇ、律華！来週の夏祭り、絶対一緒に行こうね！」

「あ、ごめん…。その日予定入ったんだぁ…」

「えぇー！？先月から一緒に行こうって行ってたじゃーん」

「本当にごめん！　その日留学してた従姉妹が帰って来るらしくて」

また、嘘をついた。

そう、また。

あたしに従姉妹なんていない。

それどころか、おじいちゃんやおばあちゃんの名前すら知らない。

私は気まぐれだけど、

よく嘘をつく。

それも平気で。

【秘密】を外にもらさないように。

それはきっと、

あたしの心があまりにも脆いから。

例えるならそう、液体窒素につけて固まったバラが、手を少し握っただけでボロボロにくずれてしまうように。

『律華は強いね』ってよく言われる。

それは違う。

『素直でいい子だねぇ』って近所の方によく言われる。

それは違う。

私は、『何』なんだろう。

普通の人じゃない、『普通の人』を演じる……、そう、

道化。

人に嫌われたくないから、いい顔をしてるだけ。

人と話をしたいわけじゃない。

友達がほしいわけじゃない。

ただ、『あの人』に嫌われないように。

その一心で。

でも、だからといって、

『あの人』の大切な人になりたいわけじゃない。

『あの人』の隣にいたいわけじゃない。

むしろ、『あの人』の大切な人になりたくない。

それはきっと、『あの人』の迷惑になってしまうから。

ただ、近くにいてほしいだけ。

あたしの思ってることは矛盾ばかり。

意味の分からない、

意味のない、
そんな何の感情も持たない言の葉を、ただただ、撒き散らすだけ。

ずるくて、
卑怯で、
嘘つきで、
最低で、
脆くて、
わがままな、
臆病者。

誰がこんなあたしの側にいてくれるだろうか、
誰がこんなあたしのことを慕うだろうか、
誰がこんなあたしのことを『友達』なんて呼んでくれるだろうか。

いっそ、この世の全てがあたしに失望して、
嫌いになってくれたら楽だろう。

でも嫌われたくない。

独りが、怖い。

だからあたしはこうして、【秘密】を守るために嘘をつく。

平気で…

平気で、

平気で。

きっとあたしはまた、今日も嘘をつく。

道化師を演じ、

『いい顔』をする。

嫌われないように。

――――――――――――

第3話「矛盾」

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

今回急に律華側の話になりました。

これから急に律華とかサブの人たち（いたら）も話すると思いますが、何卒【幼馴染みと猫と俺と。】と、作者をよろしくお願いします。

今回もあとがきまでお付き合い頂き、ありがとうございました。

感想、なんでもいいのでください、待ってます。

【＊】第４話（前書き）

この作品は、獣化の表現が含まれています。

苦手・嫌いな方はご遠慮ください。

【＊】第４話

「京介、また律華は休みー？」

「そうなんじゃね？俺は何の情報も持ってねぇから確信はねぇけどな」

律華が初めて沈んだ表情を見せたあの日から１週間が過ぎた。

今日は木曜日。

律華は学校にも、友達にさえ何の連絡も入れないまま、月曜から欠席している。

「どうしたのかな、律華……」

クラスのあちこちから律華を心配する声が聞こえる。

いつもの律華なら必ず連絡を入れる。

何かあったのか、と思うと、１週間前のあの表情が頭に浮かぶ。

「橘！！休みや遅刻は必ず学校に連絡いれてからにしろ！！！」

生活指導の岩倉が、廊下で怒鳴る。

……今、橘って行ったか？

「ごめんなさい！！遅刻しましたぁー！！！」

勢いよく教室に入ってきたのは、紛れもない、律華だった。

――――――――第４話、完。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

今回は前回からしばらく更新が滞った上に短くてすみません；；；；

次は少し長めにしようと思っていますので、よかったらまた読んで頂けたらと思います！

ありがとうございました。

【＊】第5話

肩を上下させながら教室に入ってきたあいつ。

「律華ぁ、心配してたんだよ！」

「どうして休んでたの？」

「んー？内緒♪」

そう言うあいつの笑顔は、仮面のようだった。

普通に、初対面の人間がこの笑顔の律華を見れば、誰もが思わずにっこりと微笑み返してしまいそうになるくらい明るい。

だが、その笑顔は俺の知る限り、仮面のようだ。

笑顔が顔面に張り付いて離れないというように――…。

――――――待て。

俺の知る『律華』は、本物なのだろうか。

この間、俺は確かに『いつもの律華らしくない』と感じた。

何年も一緒にいた、『律華』の笑顔。

でも、それが『もうひとりの律華』のものだったのならば。

――俺は、律華のことなんて、何も知らない。

急に襲ってきた不安。

――――何故、

不安を感じているんだ、俺は。

分からない。

分カラナイ。

ワカラナイ。

どうして、なんだ……？

――――――――

第5話、完。

なんか今回、京介が狂ってるっぽくなってますね（汗）

最初、こうなるつもりはありませんでした。（笑）

方向が変わっていきますねぇｗｗ

感想や意見、お待ちしています！
寂しいです！！↑

では、不定期ですが、引き続き更新していきますので、よろしくお願いします。

ここまで読んでいただき、ありがとうございましたっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8160r/

幼馴染みと猫と俺と。

2011年10月8日22時04分発行